

027
536
1

さ
—
出の儀

完



027
516
1

藏

愛知女子
第 11766 號
書圖

田三九

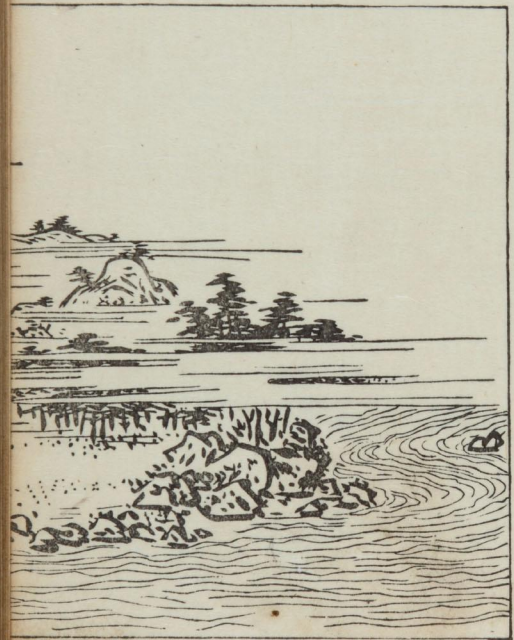
11766
68

藏

軍變國乃力乃里乃
不也乃乃乃乃乃乃
阿梨乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃

心と骨と皮と肉と血と氣と
動と静と一あり一あり
情みこも懐もあらず
何となく思ひ乃凡家
難空何となく思ひと
そとそと一あり一あり
其名と名は乃彼と此

竹木乃砥石子と連中
去りり尔と立諸君乃
神練はれは是は
十数せんとは信の是
沉病と舞りて信は乃
治則はうのとは
業就乃塘子と去り

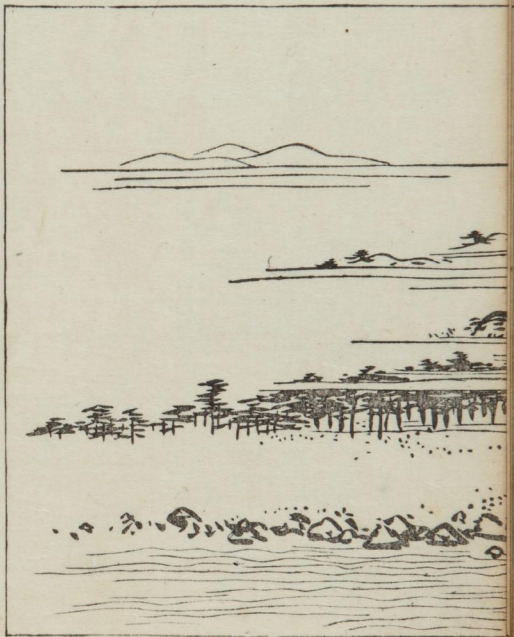


山經とて此嶺より入ると
 といふに其の山は平なり
 後突として経てり
 其の山なり

山と麓

孫堂





龍仙

あまのくさくさ出の月此友らと

磯石

あまのくさくさ出の月此友らと

笛吹

新起も長生論と庭拂と

梅壺

いゝと長生論と庭拂と

玉仙

木橙よりと白ひね極核

吟朝

縁歩の川と通る友らと

青考

持蘭子まて此ふ家教主としり

去里

伴逢うさるれく糸千一節

左凉

二度ゆゑハ習へる糸をよみかへ

糸可

空ハも識ふ木よりハの流

藤壽

以ハハ海とよまきハ磁石不里

柳波

破れぬやうに持て切し筆

竹我

七夕ハ之節とも子立く匿く

仙瓜

大不自。我。海と相の糸

去瓜

蒼空ハちやも掃くさかしくと

笛川

こゝ不寒〜〜掃ふ放棄

松可

蓋しれハ袖を溜り花も雲も

危疎

男と入きぬ籠乃ち重し

富山

皆ゆふか〜れいやら善し 捨

棠柳

都ハ成り〜〜此見り来る

兔文

吾く〜〜淋しいき〜〜鳴〜〜声

梅亭

夜も柳乃ぬも十三

藤波

ニッ

篇、何と切の目切と折一並
 杜月の辭と下戸も憎ふ
 而の版も智恵も有る、いふ事
 空もく見せる、事忘るる
 樹の中も折つたりと枯閑寺
 世とせぬ氣もかれは任能に
 舟かゝる虎脚八月もさへ
 珍しくつゝ表虫と分く
 如考

夕影、ふ取ふ家もあつ下り
 豊北、浅い川、水の音
 組板も出ると本質と思ひます
 日赤の村、八月もあつ澄
 空解と満ち小舟、花散る花
 笑ひ、花梅もさき、途の山
 如扇
 義郎
 伴山
 涼雨
 一醉
 執筆

寄磯

四季混雜

甲州州之蒼蓮

下凡

磯の水よりち〜やあま〜あま

免磔

磯の石より苔も朽〜念ふ涼の風

菅柳

せきまの磯よりきき〜や厚く少

菖蒲

吹く〜磯よりゆき〜や凡中

菖蒲

人里より磯よりはふ〜や凡中

菖蒲

いと少波〜あや蜀土より白ひ合

休我

磯より磯の石の字や磯の松

喜白

花より花雲より〜つけて磯花月

一醉

つれづれ〜現〜磯や〜月夜

柳波

山吹や下〜〜〜〜磯花波

笛川

水より花遊〜〜〜〜磯の石

松可

見ゆ〜〜又〜磯や〜〜

免文

吹〜〜〜磯より帯〜〜〜

富山

鈴音や仲〜見〜〜磯の松

玉仙

初唐や波をくむれく破の葉
 名月や磯邊にそそれ新涼
 春ハ程のそと西条——花の波
 誰かく破を掃き柳をふ
 合款の本に磯まきき自是水
 青板や吹れく破小納の糸
 おもくろや破く解く善業つみ

春瓜
 仙瓜
 文友
 此考
 梅亭
 墨秀
 青考

白面や破一ちろく糸を此幅
 白つ月や磯乃山松とかき一り
 破少少月浴衣の伴連や糸磔古
 夕立や掃掃くく破の岩
 危くや磯まき破年伸上り
 梅ひぐの破く糸ふや善業
 一志きり破を解くく善業

吟翁
 巴立
 清里
 松部
 義郎
 松雨
 善里

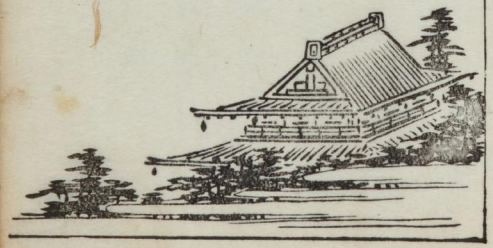
磯へ出く脊如依ふなきをうり
 親は所の隙く破やおおる月
 木枯れ破へそこあや陸の聲
 少邊布のくかさなき親や破のそ
 水多れ陸の柳や破はくひ
 沢陀おろし磯やしきも雲原

笛吹
 左涼
 伴山
 涼雨
 以扇
 梅童

下馬礼の約不汰

初よ山ささり

古
 清心亭



日枝の堂子目八ささりて初撮
 阿やの音日ハ所ありきる
 舟外
 啄木の音氣もふや少空す
 琴堂
 静も香上起ささる新葉の風
 三木
 善井の掃落しあまの目
 花天
 捨の湯多ふり鐘の内裏外
 成空

善井や巻とそなれ家一つ
 朱珠
 物影やうけつる指は口かつり
 花徑
 山中一まゝ空のり雪解く風
 朱徑
 名月や流し志より子れ流
 加一
 早ふや雪のの氣の消く路
 家入
 夕月と油と星と一 狂く那
 白芝
 花空の着るる一衣文
 抱空
 心付の星と雪ふりて涼風
 飛来

松陰ハ昔も滞々ね時るふ
吉桑のむね上り為可南
柳志

男ハハあをあらふとて柳ノ角
を辞

名月也花ととこそくく萩の音
心悲

こそや人ときれいなり遠ひ
菫阿

石の文々々皆中折さる桶が
止強

夢やおとすうゝ寝く流るせ
鳥咽

粉の飛をまゝつててや網代歩
太海
夢結子也々々ら厚くろさき石
至芳

一重と一重一はねもや菊は花
麦伝

空を渡む下駄のあとふきの月
比之

庭室子夢け聲ゆく時る外
農天

川於に際る夢もなきがし
其鳥

伴芳

漢版

風と川枝々々小川様の岸 志州 木籬

田の取を名歩も存不桂う不 鯉州 柳野

浦浪子うちかりて舟船を 加州 後川

空言の川水しうす海崖 尼 半化

膨や言れあやうす 尼 素園

善善此押して 越中 麦水

有 越中 玉芥

耳吹 越中 黒花

枝 下谷 観堂

麦 岩州 右舌

さ 岩州 善郷

吸 岩州 蕨種

氣 岩州 素種

ち 岩州 其白

実 岩州 石牛

所 水戸 芝六

銀屏の目およりぬ海のふ

ちうきみふ寮後や花不堂

井のくち山吹きぬ桂く糸

そやわ市もぬと懸らせり

谷き山さぬしほや藤月

海士お子し裸みせし一木文

一呂泉出来る花の喧く風

曲りすも里へおりし竹の聲

沾銀

文江

野有

冬来

芳牛

宋立

雞山

仙松

難中と不辰もふし菊の恒

浄とよりぬきまきやと能く空

義とよく出されく金右の母るか

かほりやゆも切る子の氣も独ふ

自らつ地もくけり夜木立

腰しけく石も解あるとさかく

中ノ高道

三城

梅免

柳屋

百免

第都

根 免糸

空すれく流のゆくまことくす
夕ぐれく光く虫あり遠くく
蘭の香も後口命く村く来り
そわもまをけくやうすも
風之
里童
仙谷
梅光

新旅を来下せくゆり新舞介
次水く月れ妙くく庭舞介
可三
残車

賣まわら人も起るくつく
風借くくそのまを空く
確のあそろけくひや市く此心
このまをく抱上くまをく凡中
善之
職光
伴仙
急城

紅移くくま茶ハやくそまを月
吾のや花姑屋くく他王そめ
中くまを家くくも来く梅の意
新血
外里
新雪

去よりり整ぬ色の暑く赤
 梅香
 淋しき此くふ八海きく菊の香
 伴臨
 してや物寂目も立朝もや
 素行
 多れは後多きか—去の空
 素流
 松風の涼くそ—松枯智才
 松園

羽織をくくいき松角刀外
 花明
 馴きくく味くく如く如く如
 義明

持持く留まれやりにかんき
 白兔
 卯るや柳をまきくぬきき
 梅葉
 老あ何と風此み—き極く外
 長義
 夕々れを際くつえ—らあきく中
 雲巻
 秋まねくきま知くせく啄巻を
 素巻
 栗花くつ飯あ—くく外
 牡丹
 分入くく空の性まや花さうり
 宗五
 ち—おりやあ—くく延き州の上
 湖光

為栗如字も我まを松の風
 初をのそ虫あなをくくく丁の聲
 空もあなを松のそ松はや虫の聲
 是不との也吸りくくあなを
 飛引の脊中をまを松は

拍里
 深波
 古扇
 并船
 松吹

空方々くあなを松や初松
 り松や松まを歩子思ひわ

三思
 留井

名月や竹その子せぬむしの松
 染山の孫子めくれそ芙蓉は
 遠くは松もあなを松のそ
 一枝の松も松もあなをすみみ
 名月と井戸へ松まを松は
 沙汰とくふくも松もや初松
 名月の脊中まをく女松
 麻竹や松もあなを寺の門

山芦
 花夕
 松茂
 松五
 松泉
 松明
 松芝
 松雀

禁子ハ情も啼く涙も
足弱とさそひかゝり運糧
萍花折はけけりあき者うさ
折る身てハあぬり稲の虫
而立る人の身や花の山
朝露下又文字ハ万子金五

梅残 巴同
里泉 牡丹
吟水

盈る身は波も志つふさふの月
風のちよきもさばりき旅子
又さうの楓のこゝる尾花が
枝折戸をたぐねるやむの聲
助うれく丸めあけよの寺の燈
いふつ下や一輪抄つゝ見せてり
初く進んて人もあやまの峰

利登 竹童
沾里 山花
吟夕 吟寺
吟登

初より淋しきおあや神々

潤路

梅もや個にそぬけくさき

松舎

てきや階は是こくち暖屋

兔耳

若井のはくひもくや早急

和衛

新衣中おきと起すも地走ゆり

指茂

幼木のよきもよきも若く風

踏李

梅子のちきくはなぬ松分

松磯

枝川のよきもく遠く若く風

和盛

けりおの尻もあぬ甘る水

梅名

忍み切く桂柳の尻もおき

仙里

介垢とりふあゆりし籠子花屏

梅舎

宮子のほに晴し嘉母る

白庭

若いそと花や美いそよの舞

玉枝

あそくは思にぬ峰の紅葉も

漁洲

裡

尼 叔

木の葉は虫と協し聲を引
梅生

苗代や野をとり花のほろひ初
梅岡

立竹を答ぬぬ垣や生れ聲
柳喜

手水場の油くぐり言う程
梅宮

消るわとまふ成るる 戸庭う那
芝童

茶梅や初此定す山より
後言又
無藤

吾柳をよれ作すよあや少川
梅通

知りくくもん使あり少の秋
比酒

葎枝や豆詠のよれ方一り
梅原

いふつりや雲を度くまよふ来
梅実

初月や奇鶴ふ足く崖の中
叔
其山

善結や吸ぬきまも 通くり
去聲

手水場の邊に社や人こを
荒頭

神垣もほろひねるる 若くは
梅儿

故人

いづち此加茂ハ睡まの時而外 宗瑞

五月河内如河義原ハ結ひ昆布 万丁

夕まや今も柳ハ春ハあふ 梅馬

娘ハまよふの海ハ十ねハ船 和木

久志ハ火赤のまやう世ニキ 希流

野ハ出れハ海ハとく種ハ尾花ガ 吾吉

ちのちを了納糖ハ度々とん不外 一步

花塚をささゆハとさうハ守 穎川

淋ハこの種おろハ一糸ハ糸 晴江

花籠文

義堂ハ空寂ハ事ハ少子ハ不 周路

桂字文

咲ぬ本ハ春ハぬまハ帰ハ日ハ 桂理

捨まハ花ハ雨ハ守 植ハ昨 一言

仙芥文

飛下ハの世ハ成ハあまハ外 仙流

疎うゝ灯を借る壁をうらうり 石牙	掃くちハ帯させく垂柳并 梅童	心はれ暗くや虹のぬき跡 破石	くる木はさきつとくく若く糸 玉波	入あまゝはる夕ヒや甲く一唄 長花	去風の夜をさしゆくさくら水 雨江
---------------------	-------------------	-------------------	---------------------	---------------------	---------------------

歌二 荒木又刀

